

息の境  
吹

野町和嘉の見た世界  
ガンジスー祈りの川に魅せられて

3

# インドの心を 育んだ大河

バラナシで行われる、日の出のアー  
ルティ(祈りの儀式)。僧侶の祈り  
には、この地に生かされていること  
への感謝の念があふれている。



ヒマラヤとインド平原の接点である聖地ハルドワールで、シヴァ神の祭りに詰めかけたおびただしい数の巡礼者。

## 多様性を呑みこんだ包容力

ヒマラヤの氷河から始まり、ガンジス平原を流れ下ってベンガル湾に注ぐ、全長2500キロに及ぶ大河ガンジス。モンスーンの降雨を集めて穀倉地帯を潤すこの流れに、インドの人々は信仰の源泉を求めてきた。

シヴァ神の住まうヒマラヤの高峰から七つの流れとなつてほとぼしり、やがて一つのガンジスに束ねられてヒマラヤの峡谷を抜け、ガンジス平原に注ぐ。天界に発し、シヴァ神への信仰と深く結びついたガンジスの水は聖水と崇められ、この川で沐浴することで罪は清められ、死に際して川辺で火葬され遺灰を流してもらえば、苦悩の輪廻転生から逃れて、来世は天国に生まれ変われるとする熱烈な信仰が受け継がれてきた。



12年ごとに行われる沐浴祭、クンプ・メーラに集結したシヴァ派の修行僧たち。

## 懐かしくもある川岸の光景

ガンジス流域には、バラナシを筆頭にインド有数の聖地が点在し、古代インドより受け継がれた祈りのかたちも、原形を保ったまま今も生きています。それら聖地が厳肅な祈りの気配に包まれるのは夕刻である。日没後、半時間ほどたち、巡礼者で埋めつくされた川岸に、僧たちが燃えさかる炎を手にして登場し、鐘の音を合図



祭日に子どもを水浴びさせる父親。こうして祈りと沐浴が一体となり身についてゆく。

アフリカや中近東方面での取材が長かった私にとって、インドは異質な土地と決めてかかっていた。だが2000年代になってインドに通い始めてみると、あらゆる多様性を呑みこんだこの土地が持つ独特の包容力にすっかり魅せられてしまった。

紀元前3000年頃から栄えていたインダス文明に、アリア人の信仰であるバラモン教が接ぎ木され、そしてヒンズー教へと受け継がれてきた歴史の本流に、仏教、ジャイナ教、各地の土俗信仰、さらにはイスラームまでが合流して、渾然一体と化した大河を形成してきたのである。その時間軸は、ヒマラヤ天界の氷河に発した清流が、聖も俗も、そして人間界の汚穢をもその内に呑みこんで、滔々と流れゆくガンジスの流れと相似形をなしているように思えるのである。



古チューブの小舟を使った漁。近年ガンジス川の汚染がひどく、漁業は壊滅的。

に、マントラを唱えながら炎を回し始めると、信者も唱和して今日一日を締めくくる厳かな祈りは頂点に達する。

儀式を終えると、巡礼者たちはそれぞれの思いを込めて灯籠を流す。日本人が親しんできた祈りのかたちは、言うまでもなく仏教を通じてインドからもたらされたものだ。それだけに川岸で繰り広げられる情景は、私たちのDNAに一度は刷り込まれてきたにもかかわらず、忘れかけていた祈りのルーツとの出会いでもある。

ガンジス沿いの聖地を訪ねるたびに、精神性を託した聖地の力というものを再認識させられる思いだ。

(写真・文／野町和嘉)



祭りが終わり、コルカタのフーグリー川に流されるカーリー女神像。塑造であるためすぐに溶ける。

渡し船に乗りこも熊と熊使い。



花は祈りに欠かせないため、インドの聖地ではおびただしい量の花々が取引されている。



野町和嘉(のまち・かずよし)  
1946年、高知県生まれ。杵島隆に師事した後、1971年にフリーの写真家となる。1972年サハラ砂漠への旅をきっかけにアフリカの乾燥地帯の取材を始め、アビサ半島、チベット、アンデス、ガンジス川流域などを長期取材。荒々しい自然と向き合ってきた人々の祈りと暮らしを捉え、国内外の雑誌に発表。「サハラ空と砂の間」「ナイル」「チベット天の大地」「メッカ巡礼」「地球巡礼」など多くの写真集が国際共同出版される。ローマ、ミラノ、台北ほかで「聖地巡礼」展を開催。土門拳賞、芸術選奨文部大臣新人賞、日本写真協会国際賞など受賞多数。2009年紫綬褒章受章。  
Website ▶ [www.nonachi.com](http://www.nonachi.com)